あとがき

「開発法学」という語は、厳格な定義を本旨とする法学界はもとより一般的な用語としても認知されているとはいい難い。その原語を求めるとすれば"Law and Development Study"となろう。この語については、これまで「法と発展研究」という訳語をあててきており、本書の構想の基礎となっている拙著『アジアの法と社会』(三省堂、一九八七年)でもその訳を採用し、アメリカにおけるその研究の問題点とパラダイム崩壊について紹介している。

一九八七年六月から海外調査員として二年間、インドとイギリスで研究をさらに深める機会をえた。特にイギリスではロンドン大学東洋アフリカ学院に籍をおいたが、同学院とウオーリック大学の修士課程プログラムとして八八年から同時に開講された"Law and Development Study"の授業に参加し、また担当者との議論を通じて、その復活の兆しと新しい問題意識を知る機会をもった。第三世界の開発と法をめぐる諸問題についての基本書ないし教科書をつくるという本書の基本的な構想はこの中で生まれたといってよい。その訳語として「開発法学」をあてることについては、"Law and Society (Study)"が「法社会学」と訳され、また最近では"Law and Women

Study" が「法女性学」と訳されている状況をみるならば、また、この分野が開発経済学、開発政治学や開発社会学などと並ぶ開発諸学および法学の重要な研究分野であることを考えれば、十分に説得力を有すると信じている。

このような作業が個人の能力を超えるものであることはいうまでもない。幸いにして、帰国後、この構想を実現するための小さな研究会を組織する機会に恵まれた。そこで「はしがき」に掲げさせて頂いた新旧・内外のアジア経済研究所の法律グループに関係する方々の参加を得て出来上がったのが本書である。本書が日本の第三世界法研究の発展に対して大きく寄与することを願いかつ信じている。また個人的にも、この仕事がもう四半世紀にもなる私のアジア経済研究所での法律研究の一つの区切りとなるのではと考えている。このような仕事は、膨大な資料と豊かな人材を擁するアジア経済研究所という発展途上国問題の総合的機関だからこそ可能であったと誇りをもっていうことができる。研究会メンバーの方々、さらにこれまでアジア経済研究所の自由な研究を支えてこられたすべての人々に心から感謝する次第である。

一九九二年二月

編　者

「アジアを見る眼」シリーズ発刊にあたって

地中海から太平洋まで、この広くアジアと呼ばれる地帯には幾十かの国がある。その大部分は第二次世界大戦以後、古い植民地体制から脱して新興の独立国となったものである。世界の人口の半ば以上のものがここにある。これらの新興国はそれぞれの立場に立って、建国創業の仕事に力をつくしている。

その業は果たして障害なく着々と進んでおるか。だれもがこれに対して頭をかしげるであろう。そしてだれもがアジアは「流動的」であるという。

流動的とは何であるか。また何でないか。いくたの混みいった事態のなかを、一本の金の線が生々発展的に縫っているのも流動的である。経済は着々と成長し、政治は一つの体制のなかで徐々に整備されているような場合がそれである。

アジア諸国の大部分については、事態はこのように簡単ではない。もちろん、経済の場面には大きな発展・成長の芽生えはある。しかし、他面においてそれを抑制するものが力づよい。またおよそ発展や成長を考える場合、在来流行の理解によるパターンを以ってするのが果たして正しいか、との疑問もでてくる。さらに政治体制については、イデオロギーの対立、複合民族国家における特殊なナショナリズムに伴う民族や種族間の闘争があって、政治的安定はなかなか期すべくもない。独立国家の幼年期に伴う政治的、行政的未熟もまた考えられるべき大きな原因である。

こういう次第で、アジアが流動的であるとは、一つの混沌を意味するものといいえようか。そしてその上に立っていかなる経済・社会・政治の体制が整いだされるであろうか。――この意味で二〇世紀後半のアジアは世界における「問題」、いな最も大きな「問題」である。

アジア経済研究所は、まさにこの「問題」の理解に向かって、ひたすら前進をつづけている。われわれの期するところは、まさにそれぞれの国の現実に即した精確な知識を供しよう、そしてこの大きな「問題」について静かなサービスをいたそうとするに尽きる。設立以来すでに七カ年余り、専らそういう道を歩んできたし、今後もそれに変わりはない。このシリーズは、多くの研究や調査の報告書、現地調査を土台として、アジアについての解説書・教養書たることを目標とするものである。

一九六六年三月

アジア経済研究所　東畑精一

アジアを見る眼

「くらし」シリーズ既刊案内

〈B6変型判〉

70 「はかり」と「くらし」 第三世界の度量衡

小島麗逸／大岩川嫩編

◉日本図書館協会選定図書

発展途上国のくらしに根ざした度量衡の多様な実態を、三十数名の地域研究者が体験的に論じ、解明する。第三世界の地域理解に必須の手引である。写真・図版多数。一九八六年刊

73 「こよみ」と「くらし」 第三世界の労働リズム

小島麗逸／大岩川嫩編

◉日本図書館協会選定図書

三十数途上国の生産と生活のリズムを、地域研究者の眼で風土に根ざした多様な「暦」の世界に探る。巧まざる文明批評。写真・図版多数。一九八七年刊

78 「すまい」と「くらし」 第三世界の住居問題

堀井健三／大岩川嫩編

伝統的な途上国の庶民の住居は、近代化の波に洗われて変貌しつつある。都市のスラムに農村の集落に、その多様な実態を国別に浮き彫りにする。一九八九年刊

80 「のりもの」と「くらし」 第三世界の交通機関

吉田昌夫／大岩川嫩編

ベチャから飛行機まで――途上国の人々の暮らしの足として、経済活動の動脈として活躍する多様な交通機関のあり方を興趣豊かに解説する35編。一九九〇年刊

85 「たべものや」と「くらし」 第三世界の外食産業

岩崎輝行／大岩川嫩編

民衆のエネルギーの源泉である食の世界を、「外食」のありようから楽しくそして鋭く描き出す四〇編。途上国理解にも旅行者のハンドブックにもすぐれて有用。一九九二年刊